

タイトル	退職にあたって - ある英語学教員の遍歴 -
著者	上野, 誠治; UENO, Seiji
引用	北海学園大学学園論集(199): -
発行日	2026-03-27



退職にあたって

—— ある英語学教員の遍歴 ——¹

上 野 誠 治

Education is not the filling of a pail, but the lighting of a fire.— W. B. Yeats

0. はじめに

思い返せば、1992年4月（平成4年）に北海学園大学教養部に着任して以来、34年という歳月が流れ、今年度末をもって定年退職することとなりました。半生を本学で過ごしたことになりますが、長かったようでもあり、あっという間だったようにも感じています。この間、同僚諸氏をはじめ、本学に関わるすべての方々から公私にわたり多くのご指導・ご鞭撻を賜りました。大過なく勤め上げることができましたのも、皆さまのお力添えのおかげであり、心より感謝申し上げます。

1. 「英語を教える」から「英語（という言葉）について教える」へ

赴任当初は教養部所属で、1年目は人員に余裕があったためか学内委員を免除され、担当は一般教育科目の「英語」でした。英語科には大学の先輩である池内静司先生、本城誠二先生、さらに高校時代の同級生でもある石井晴子先生もおられ、大変心強く感じたものです。本学での最初の授業は2部の再履修クラスで、古い木造の旧札商校舎（現・8号館）の、どこかセピア色を帯びた教室の風景を今でも鮮明に覚えています。当時の2部には社会人学生も一定数おり、しかも再履修クラスのため何人かはやる気のなさそうな男子学生でしたので、30代半ばの「若き教員」であった私は、かなり緊張しながら初授業に臨みました。

当時は1学期の定期試験が夏休み明けの9月に実施されていたこともあり、また前述の通り赴任直後は学内委員もなかったため、1学期の授業が終わるとすぐに7月15日からカナダへ飛びました。バンクーバーを拠点に、バンクーバー島のコモックス、トロント、ナイアガラを巡る旅を満喫し、9月9日に帰国しました。雑務に追われることもなく、長い夏休みを心ゆくまで楽しめたのは幸運でした。

¹ 本稿の増補版が『人文論集』第80号に収録される予定である。

1994年10月（平成6年）には札幌市営地下鉄東豊線が延伸開業し、「学園前」駅が誕生しました。それを機に通勤手段を自家用車からJR・地下鉄へと切り替えました。前年の1993年（平成5年）には人文学部が開設され、女子学生が増え、校舎の増改築・改装も進み、キャンパスは次第にモダンな姿へと変貌していきました。

1998年4月（平成10年）には教養部が解体され、所属教員は既存学部へ分属することになりましたが、そこに至るまでの数年間は、教養教育のあり方をめぐって教養部内外で激しい議論が続きました。また、教養部教員がどの学部に分属されるかも大きな問題でしたが、幸いにも私は第一希望であった人文学部英米文化学科に所属することができました。今から思えば、英語学はもとより英語史の講義も担当できたことが考慮されたのかもしれませんが。まさに「芸は身を助く」です。

以後しばらくは、一般教育科目である「英語講読」「英語・文化演習」「言語学Ⅱ」に加え、専門教育科目である「英語学概論」「英語史概説」なども担当し、いわば二足の草鞋を履く状況が続きました。当時はまだ、一般教育科目と専門教育科目の担当割合に関するルールが定まっておらず、多いときには両方合わせて8コマを受け持つこともありました。また、人文学部1期生（2部）には、知的な学問への憧れを抱いて入学した社会人学生も多く、彼らの発案で夜遅くに英語学の自主ゼミを行ったこともありました。

こうした経験に加えて、学部の諸事情により2011年4月（平成23年）に一般教育科目（英語）担当から専門教育科目（言語学・英語学）担当へと（いわゆる別表2から別表1へ）配置転換されました。それに伴い、私の教育内容も「英語を教える」から「英語（という言語）について教える」へと次第に軸足を移していきました。また、この配置転換とともに研究室も4号館から現在の7号館に移ることになりましたが、ちょうどその「引っ越し」の最中に東日本大震災（3月11日）が起こったため、当時のことをよく覚えています。

2. 英語学とは何か

ところで、専門教育科目としての「英語学（English linguistics）」とは何でしょうか。かつて非常勤で出講していたある大学の資料では、英語担当教員の専門が一律に「英語学」と記されていました²。専門外の方にとっては、英語学・英米文学・英語教育といった領域の違いは見えにくく、単に「英語を教える人＝英語を専門とする人」と受け止められているのだと感じたものです。しかし、英語学とはその英語表記 English linguistics が示す通り「英語の言語学」であり、言語学（linguistics）の一分野です。そのため私は折に触れて「主に英語を研究対象とする言語学が専門です」と説明してきました。

² 物理学や生物学が「物理・学」「生物・学」であるように、英語学も「英語（の）・学」と解釈されたのであろう。それはまったくの誤解とまでは言えないものの、本来の英語学は「英語（の）・言語学」の短縮形と分析されるべきである。

また、言語学関連の文献では、言語学を「言語を研究する科学」と定義することが多く、Brown et al. (2014 : 11) も科学的方法 (scientific method) に基づく仮説検証 (hypothesis testing) と反証可能性 (falsifiability) の重要性を述べています。

We began our presentation with the claim that linguistics is the science that studies language. Another way to express this is to say that linguistics is the scientific study of language. This means that linguists need to follow certain procedures to make sure that their conclusions are appropriate. This is the **scientific method**. Essentially, this consists of formulating a first hypothesis on the basis of the available data and then checking the validity of this hypothesis against new data. If the data do not match the hypothesis, the first hypothesis is proven wrong and the linguist will need to formulate a new hypothesis. This implies that a theory can never be proven right but that it can be proven wrong any time a new observation (a new datum) contradicts it. This is called the **principle of falsification**.³ (下線は筆者、太字は原著者)

したがって英語学とは「英語という言語を科学的に研究する学問」であり、その意味では人文科学よりも人文科学との親和性が高いと思われます。

3. 人文学と人文科学

さて、私が所属する人文学部および大学院文学研究科は「新人文主義」を理念として掲げています。濱忠雄先生 (本学名誉教授) によれば、新人文主義とは「近代ヨーロッパに起源を持つ人文主義を継承しつつ、その隘路を乗り越え、他者や自然と共生しながら人間のあるべき生き方を追求する」ものです⁴。在職中、私も折に触れて「新人文主義とは何か」「人文学とは何か」を考えてきましたが、残念ながらいまだ得心のいく答えには至っていません。

そもそも、学問とは人文・社会・自然の別を問わず、「人間とは何か」「人間はいかに生きるべきか」という究極の問いに取り組み続ける営みであると思います。社会科学は「人間と社会」、自然科学は「人間と自然」、そして人文科学は「人間と文化」、すなわち言語によって紡がれ継承されてきた文化の観点からその問いに向き合います。そう考えると、濱先生の『『新人文主義』を北海学園大学の理念に』というご提言にも深く納得がいきますし、その意義は本学にとどまるもの

³ Brown, Steven, Salvatore Attardo, and Cynthia Viglotti (2014) *Understanding Language Structure, Interaction, and Variation, Third Ed.: An Introduction to Applied Linguistics and Sociolinguistics for Nonspecialists*. University of Michigan Press ELT.

⁴ 濱忠雄 (2014) 『『新人文主義』の深化を祈念して』『人文論集』第56号 (北海学園大学人文学部)。なお、その中で濱先生は「人文(科)学」と表記されておられる。

ではないでしょう⁵。言語学（英語学を含む）は、その文化の担い手である言語の仕組みを科学的に解明しようとする学問です。

一方、安酸敏眞先生（本学名誉教授・理事長）は「人文学から《教養》の契機が抜け落ち⁶，《研究》一辺倒になったところに『人文科学』という変異体が現れる」と述べ、人文科学にやや批判的な立場を示されています⁷。しかしこれは、人文学が「人間とその文化を総合的に探究する学問」であることを前提に、専門化・細分化が進む中でも「全体性」を見失ってはならないという警鐘と理解すべきであると思います。

卑見を述べれば、人文学は「人間とその文化を総合的に探求する学問」なので、人間文化の種々のアスペクトを対象として論究する。しかしそれは専門化・細分化した個々の部分ではなく、各部分の連関の総体としての全体を、つねに視野に入れておかなければならない。そのためには、ある種の間人学（とりわけ哲学的人間学）が不可欠である。サイエンスとしての人文科学は、必ずしも哲学的洞察を必要としないが、人間とその文化をトータルに問題とする人文学には、哲学的人間学の識見は必須である⁸。（下線は筆者）

たとえ言語学が「専門化・細分化」された科学であり、「サイエンスとしての人文科学」であるとしても、全体は部分から構成される以上、その重要性が揺らぐことはありません。とはいえ、「木を見て森を見ず」になってもいけないでしょう。その点を踏まえて、今後も言語学・英語学という「人文科学」の現場で地道な研究を続けつつ、ときには「人文学」という高みから森全体を見渡す姿勢も忘れずにいたいと思います。

4. 終わりに

「人間とは何か」という問いは永遠の問いであり、簡単に明解な答えが得られるものではないかもしれません。だからこそ、常に「ああでもない、こうでもない」と考え続けることが大切なのだと思います。それは反証主義（falsificationism）の精神であり、ネガティブ・ケイパビリティ（negative capability）にも通じる態度です⁹。

⁵ 濱忠雄（2020）「『新人文主義』を北海学園大学の理念に」『北海学園大学創基七十年記念誌』（北海学園大学）。

⁶ 契機とは「要素（エレメント）が素材の要因であるのに対し物事の変化や発展を引き起こす動的要因となるもの」のことであろう。（『広辞苑』）

⁷ 安酸敏眞（2015）「人文学を学ぶ意義——「パンのための学問」がもてはやされる現代において——」『季刊創文』2015夏NO.18（創文社）。

⁸ 同上

⁹ 英国ロマン派の詩人ジョン・キーツ（John Keats）が1817年に提唱した概念で、シェイクスピアの偉大さを説明するために用いた語。「どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力」「性急に証明や理由を求めず、不確実さや不思議さ、懐疑の中にあることができる能力」を指す。帯木蓬生（2017）『ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』（朝日新聞出版）参照。

本稿を執筆する中で自分なりに考えを巡らしましたが、誤解や曲解があるかもしれません。その際は、ご教示いただければ幸いです。

このような拙文をもって、北海学園大学を離れるご挨拶とさせていただきます。改めまして、在職中は公私にわたり大変お世話になりました。未来は誰にとっても未知の領域であり、不安を覚えることもあるでしょうが、そうした壁をひとつひとつ乗り越えた先に思いがけず輝かしい道が開けることもあります。若い世代の皆さまのご活躍と、本学のさらなる発展を心より祈念し、筆を擱くことにいたします。長い間、本当にありがとうございました。

略 歴

うえの せいじ
上野 誠治 1958 (S33) 年 3 月 10 日 石狩郡当別町生まれ、小樽市出身

学 歴

- 1970 年 3 月 (S45) 小樽市立桜小学校卒業
- 1970 年 4 月 (S45) 小樽市立桜町中学校入学
- 1973 年 3 月 (S48) 札幌市立篠路中学校卒業
- 1976 年 3 月 (S51) 北海道札幌北高等学校卒業
- 1977 年 4 月 (S52) 北海道大学文類入学
- 1981 年 3 月 (S56) 北海道大学文学部文学科英語英米文学専攻課程卒業 (文学士)
- 1983 年 3 月 (S58) 北海道大学大学院文学研究科英米文学専攻修士課程修了 (文学修士)
- 1987 年 3 月 (S62) 北海道大学大学院文学研究科英米文学専攻博士後期課程単位取得満期退学

職歴・研究歴

- 1987 年 4 月 (S62) 東日本学園大学教養部講師 (1988 年 3 月まで) (現 北海道医療大学)
- 1988 年 4 月 (S63) 釧路公立大学経済学部講師 (1992 年 3 月まで)
- 1992 年 4 月 (H4) 北海学園大学教養部助教授 (1998 年 3 月まで)
- 1998 年 4 月 (H10) 北海学園大学人文学部英米文化学科助教授 (2003 年 3 月まで)
- 2003 年 4 月 (H15) 北海学園大学人文学部英米文化学科教授 (現在に至る)
- 2003 年 4 月 (H15) プリティッシュ・コロンビア大学 (カナダ, UBC) 言語学科客員研究員 (北海学園大学在外研修, 2004 年 3 月まで)
- 2011 年 4 月 (H23) 北海学園大学大学院文学研究科教授修士課程担当 (現在に至る)
- 2015 年 4 月 (H27) 北海学園大学大学院文学研究科教授博士 (後期) 課程担当 (現在に至る)
- 2016 年 4 月 (H28) 北海学園大学人文学部長 (2019 年 3 月まで)
- 2020 年 4 月 (R2) 北海学園大学大学院文学研究科長 (2023 年 3 月まで)

非常勤講師歴

- 1982 年 4 月 (S57) 北海道栄養短期大学附属高等学校 (1985 年 3 月まで) 【英語】 (現 北海道文教大学附属高等学校)
- 1985 年 4 月 (S60) 酪農学園大学 (1988 年 3 月まで) 【英語】
- 1992 年 4 月 (H4) 北海道武蔵女子短期大学 (2003 年 3 月まで) 【英作文, 英文講読】
- 1993 年 4 月 (H5) 北星学園女子短期大学 (1995 年 3 月まで) 【英文法】 (現 北星学園大学短期大学部)

- 1995年4月(H7) 北海道大学言語文化部(1999年3月まで)【英語】
- 1999年4月(H11) 北星学園大学文学部(2000年3月まで)【英語史】
- 2000年4月(H12) 北海道大学文学部(2001年3月まで)【英語学演習, 英語学Ⅰ】
- 2007年4月(H19) 藤女子大学文学部(現在に至る)【英語史】
- 2008年4月(H20) 札幌大学外国語学部(2009年3月まで)【英語史】
- 2023年4月(R5) 北星学園大学文学部(現在に至る)【英語史】
- 2023年4月(R5) 北星学園大学大学院文学研究科(現在に至る)【理論言語学, 英語史特殊研究(隔年開講)】

担当科目

学部専門科目: 英語学概論Ⅰ, 英語学特論Ⅰ, 英米文化専門演習, 人文学基礎演習, 人文学演習
 大学院科目: 英語研究特殊講義Ⅰ, 英語研究特殊講義演習ⅠA・ⅠB, 欧米言語・思想文化論文指導特殊演習ⅢA・ⅢB・ⅢC

学内委員(主なもの)

入試委員, 特別入試委員, 入試出題委員, 教務委員, 学生委員, 機関長選挙管理委員, 研究紀要委員, 教職課程委員, 英語教育委員, 協議員, 七十年史編纂委員, 将来構想委員, 体育館建設検討委員, 在外・国内研修委員, 人文論集担当委員, 人文学部長, 文学研究科長など

所属学会

- 1981年4月(S56) 日本英文学会北海道支部(終身会員)
- 1984年11月(S59) 日本英語学会(終身会員)
- 1986年4月(S61) 日本英文学会(終身会員)
- 1993年11月(H5) 英語語法文法学会(2017年4月まで)
- 2009年4月(H21) 北海学園大学人文学会(現在に至る)
- 2011年12月(H23) 日本歴史言語学会(現在に至る)
- 2011年12月(H23) アメリカ言語学会(Linguistic Society of America, 現在に至る)

海外研修旅行学生引率

- 1991年3月10日～4月3日(H3) 釧路公立大学 第1回海外研修旅行
 Capilano College, North Vancouver, B.C., Canada (現 Capilano University)
 Simon Fraser University, Burnaby, B.C., Canada
- 2002年7月7日～7月21日(H14) 北海学園大学人文学部 第3回ブロック大学研修旅行
 Brock University, St. Catharines, ON, Canada

2007年9月2日～9月23日 (H19) 北海学園大学人文学部 第7回ブロック大学研修旅行
Brock University, St. Catharines, ON, Canada

2019年9月1日～9月22日 (H31) 北海学園大学人文学部 第18回ブロック大学研修旅行
Brock University, St. Catharines, ON, Canada

研究助成

1990年度 (H2) 釧路公立大学国外研修助成 (出張先: アイルランド, イギリス)

「英語教授法研究と英語研修」

1990年7月25日～8月13日

St. Paul's College, Dublin, Ireland

1995年度 (H7) 北海学園学術研究助成 (共同研究, 代表 上野之江)

「マルチメディアによる語学教育への基礎研究」

2000年度 (H12) 北海学園学術研究助成 (一般研究)

「英語構文に関する統語・意味論的研究」

2002年度 (H14) 北海学園学術研究助成 (共同研究, 代表 桑原俊一)

「欧米文化の諸相—異文化理解と日本の課題」

2003年度 (H15) 北海学園在外研修助成 (出張先: カナダ)

「英語におけるネクサス構文の統語的および意味的研究」

2003年4月1日～2004年3月21日

The University of British Columbia, Vancouver, Canada

2010年度 (H22) 北海学園学術研究助成 (共同研究, 代表 船岡 誠, 2011年度まで)

「新人文主義の位相—基礎的課題—」

2013年度 (H25) 北海学園学術研究助成 (総合研究, 代表 安酸敏眞, 2014年度まで)

「人文学の新しい可能性」

2023年度 (R5) 北海学園学術研究助成 (一般研究)

「英語の歴史的言語学的変化に関する研究」

学外活動

2005年4月 (H17) 札幌市立百合が原小学校保護者と教職員の会会長 (2012年3月まで)

2005年11月 (H17) 札幌市立百合が原小学校評議員 (2015年3月まで)

2011年12月 (H23) 日本歴史言語学会理事・広報委員長 (2017年3月まで)

2015年4月 (H27) 日本英文学会北海道支部副支部長 (2019年3月まで)

2019年4月 (H31) 日本英文学会北海道支部支部長 (2023年3月まで)

主 要 業 績

研究業績（雑録・その他も含む）

1. 著書（単著）

1. 『言葉の窓から見える風景—英語を手がかりに言葉の世界を探る—』2014年10月，共同文化社

2. 学術論文

1. “On the Syntax of *Not* and Multiple Negations” 1983年6月，『北海道英語英文学』第28号，日本英文学会北海道支部
2. 「With 絶対構文についての一考察」1986年6月，『北海道英語英文学』第31号，日本英文学会北海道支部
3. 「With 絶対構文における語彙的照応形主語について」1988年6月，『東日本学園大学教養部論集』第14号，東日本学園大学
4. 「There 構文と提示機能について」1989年3月，『人文・自然科学研究』創刊号，釧路公立大学
5. 「英語の法性から見た二重否定について」1991年3月，『人文・自然科学研究』第3号，釧路公立大学
6. 「Which is more の語法」1996年9月，『学園論集』第89号，北海学園大学
7. 「心的挿入節を導く which と非制限的用法」1999年10月，葛西清蔵（編著）『英語学と現代の言語理論』，北海道大学図書刊行会，pp. 61-73
8. 「ヴェルネルの法則の記述に関して」2001年11月，『人文論集』第20号，北海学園大学人文学部
9. 「関西方言における「へん否定」について」2003年3月，『人文論集』第23・24合併号（人文学部開設10周年記念），北海学園大学人文学部
10. 「禁止を表す否定-ing 節についての覚え書き」2004年11月，『人文論集』第29号，北海学園大学人文学部
11. 「Google を活用した英語の用例検索：事例研究」2008年3月，『人文論集』第39号，北海学園大学人文学部
12. 「英語における語順の重要性」2008年12月，『年報 新人文学』第5号，北海学園大学大学院文学研究科
13. 「ヴェルネルの法則に見られる記述の多様性とその原因について」2009年11月，『人文論集』第44号，北海学園大学人文学部
14. 「ゲルマン祖語における子音変化について」2010年9月，『学園論集』第145号，北海学園

大学

15. 「グリムの法則とヴェルネルの法則の接続について」2011年3月、『人文論集』第48号，北海学園大学人文学部
16. 「ゲルマン祖語における閉鎖音の変化：ヴェルネルの法則再考」2012年3月、『新人文主義の位相—基礎的課題—』（北海学園学術研究助成共同研究報告書），北海学園大学人文学部
17. 「英語学・言語学の可能性」2015年3月、『人文学の新しい可能性』（北海学園学術研究助成総合研究報告書），北海学園大学人文学部
18. 「ことばの中の認識の違い」2016年8月、『人文論集』第61号，北海学園大学人文学部
19. 「語の派生と内部構造について—coeducationの派生と逆形成の観点から—」2019年8月，『人文論集』第67号，北海学園大学人文学部
20. 「イエスベルセンの法則に関する覚え書き—spinachの発音は[spɪnitʃ]か[spɪnidʒ]か—」2025年3月，『人文論集』第78号，北海学園大学人文学部

3. 研究ノート・資料等

1. 「古英詩『十字架の夢』注解（1）」1999年6月『学園論集』第100号，北海学園大学
2. 「古英詩『十字架の夢』注解（2）」2000年12月『学園論集』第106号，北海学園大学
3. 「古英詩『十字架の夢』注解（3）」2007年7月『学園論集』第137号，北海学園大学
4. 「翻訳と解説 形態論：語構造の分析（1）」2012年11月，『人文論集』第53号，北海学園大学人文学部
5. 「翻訳と解説 形態論：語構造の分析（2）」2013年3月，『人文論集』第54号，北海学園大学人文学部
6. 「*The 5 Minute Linguist* 注解（その1）」2023年12月，『学園論集』第192号，北海学園大学
7. 「ヴェルネルの法則の一般化における諸問題」2025年4月，『第69回大会（2024年度）Proceedings』，日本英文学会北海道支部

4. 学会発表・講演等

1. “A Note on the Syntax of *not*” 1982年10月，日本英文学会北海道支部第27回大会，北海道大学文学部（1982.10.3）
2. 「With 絶対構文について」1985年10月，日本英文学会北海道支部第30回大会，北星学園大学（1985.10.5）
3. “Some Observations Concerning With-Constructions” 1986年9月，The 7th Colloquium of Generative Linguists in the Northern Periphery，北海道大学言語文化部（1986.9.27）
4. “Some Remarks on the So-called ‘Bare-NP Adverbs’” 1987年12月，The 17th Colloquium

of Sapporo Linguistics Circle, 北海道大学言語文化部 (1987.12.5)

5. 「法助動詞の否定と二重否定について」1989年10月, 日本英文学会北海道支部第34回大会シンポジウム, 札幌大学 (1989.10.1)
6. 「Which is more の表現について」1997年10月, 日本英文学会北海道支部第42回大会シンポジウム, 北海道大学文学部 (1997.10.5)
7. 「英語の学びと文法—英語の語順について」2008年11月, 第40回上川・旭川地区中学校・高等学校英語科連絡合同研究会, 旭川西高等学校 (2008.11.13)
8. 「ヴェルネルの法則の記述について」2009年10月, 日本英文学会北海道支部第54回大会, 北海道教育大学函館校 (2009.10.4)
9. 「ゲルマン祖語における子音変化の記述をめぐって」2010年12月, 大阪言語研究会第168回公開講演会, The 19th Indo-European Colloquium of Japan, 大阪大学 (2010.12.11)
10. 「身近な言語学—言葉の秘密, 言葉への挑戦—」2015年10月, 第7回人文学の挑戦, 紀伊國屋書店札幌本店 Sapporo55 ビル1階インナーガーデン (2015.10.25)
11. 「ことばの中の認識の違い」2015年11月, 北海学園大学人文学会第3回大会シンポジウム, 北海学園大学 (2015.11.14)
12. 「ヴェルネルの法則の一般化における諸問題」2024年10月, 日本英文学会北海道支部第69回大会セミナー, 北海道教育大学旭川校 (2024.10.6)

5. 勉強会発表

1. “Why can Children Acquire their Mother Tongue?—A Sketchy Outline of Chomsky’s Theory—” 1989年7月, 釧路公立大学教員有志英語勉強会 (1989.7.17)
2. “A Jumble of Words” 1989年9月, 釧路公立大学教員有志英語勉強会 (1989.9.18)
3. “An Enjoyable Trip to Kobe” 1989年12月, 釧路公立大学教員有志英語勉強会 (1989.12.4)
4. “A Small Talk on the Days and the Months” 1990年2月, 釧路公立大学教員有志英語勉強会 (1990.2.26)
5. “How Many Colors in the Rainbow?” 1990年4月, 釧路公立大学教員有志英語勉強会 (1990.4.16)

6. 出前講義・高大連携授業

1. 「英語の歴史」2004年7月, 鹿追高等学校 (2004.7.5)
2. 「英語の歴史」2004年10月, 札幌新川高等学校 (2004.10.22)
3. 「考える文法をめざして」2005年7月, 室蘭清水丘高等学校 (2005.7.22)
4. 「英語の歴史」2005年9月, 札幌国際情報高等学校 (2005.9.22)
5. 「言語研究の楽しさ—言語学って何?—」2007年7月, 滝川高等学校 (2007.7.17)

6. 「言語研究の楽しさ一言語学って何？」2007年7月，旭川西高等学校（2007.7.23）
7. 「英語の歴史」2008年9月，札幌東陵高等学校（2008.9.25）
8. 「英語の歴史」2011年6月，札幌あすかぜ高等学校（2011.6.22）
9. 「言語研究の楽しさ一言語学って何？」2011年10月，滝川高等学校（2011.10.26）
10. 「英語の歴史」2013年7月，市立函館高等学校（2013.7.17）
11. 「言葉の研究とその魅力」2014年8月，平成26年度高大連携授業（講義全体テーマ：「言葉の魅力を探ろう」），北海学園大学（2014.8.6）
12. 「英語の歴史」2015年11月，静内高等学校（2015.11.5）
13. 「英語における複数形のはなし」2019年10月，旭川南高等学校（2019.10.21）
14. 「言語研究の楽しさ一言語学って何？」2023年11月，専修学校クラーク高等学院札幌大通校（2023.11.27）
15. 「英語における複数形の変遷」2024年7月，北海高等学校（2024.7.17）

7. オープンキャンパス模擬講義

1. 「ことばに潜む法則を探そう」2008年8月，第2回オープンキャンパス，北海学園大学（2008.8.4）
2. 「言語「楽」の醍醐味」2015年8月，第2回オープンキャンパス，北海学園大学（2015.8.7）
3. 「大学で何をするか」2016年10月，保護者懇談会・ミニオープンキャンパス学部長入門ゼミナール，旭川北洋ビル（2016.10.1）
4. 「英語も変化する！」2022年10月，第3回オープンキャンパス③，北海学園大学（2022.10.15）

8. その他

1. 「新たな出会いを前に」1992年4月，『あうろーら』第5号，釧路公立大学
2. 「言語学遊び—自己紹介に代えて」1999年3月，『人文フォーラム』10，北海学園大学人文学部
3. 「英語の本質を求めて—英語学からのアプローチ」1999年9月，『人文フォーラム』11，北海学園大学人文学部
4. 「夕張研修に参加して」2000年2月，『平成11年度教育実習Ⅱ準備研修会研修報告』，北海学園大学教育実習準備研修会実行委員会
5. 「英語における原理を追求する言語学としての英語学」2000年5月，『北海学園大学2001』大学案内
6. 「平成12年度夕張研修会—ひとつの感想」2001年2月，『平成12年度教育実習Ⅱ準備研修会研修報告』，北海学園大学教育実習準備研修会実行委員会

7. 「研修成果報告書」(2003年度在外研修報告)2004年5月, 北海学園大学
8. 「出会いと $y=ax$ 」2004年7月, 『図書館だより』第26巻第2号, 北海学園大学図書館
9. 「バンクーバー在外研修顛末記」2004年7月, 『学報』第57号, 北海学園大学
10. 「寒い冬の日に熱い豆がゆはいかが」2006年3月, 『人文フォーラム』24, 北海学園大学
11. 「【ブロック大学海外研修旅行報告】カナダ・ブロック大学での英語集中プログラム」2008年3月『人文フォーラム』28, 北海学園大学
12. 「送る言葉—栗原豪彦先生に感謝を込めて」2010年3月, 『人文論集』第45号, 北海学園大学人文学部)
13. 「ことばの窓を通して人間を知る」2010年6月, 『学報』第82号, 北海学園大学
14. 「ゼミ☆訪問 上野誠治ゼミ」2011年5月, 『北海学園大学2012』大学案内
15. 「開校10周年を迎えて」2011年10月, 『ひこうせん』第19号, 札幌市立百合が原小学校
16. 「英米文化学科1年生のみなさんへ」2012年3月, 『英米文化学科1年生に薦めたい本—第2集—』巻頭言, 北海学園大学人文学部
17. 「ゼミ★訪問 上野誠治ゼミ」2014年5月, 『北海学園大学2015』大学案内
18. 「はじめに」2016年4月, 『履修の手引』, 北海学園大学人文学部
19. 「はしがき」2016年4月, 『「自分」で考える人文学—北海学園大学人文学部基礎ゼミハンドブック』, 北海学園大学人文学部
20. 「北の大地から活躍の場を求めて」2016年4月, 「学部長からのご挨拶」人文学部ウェブサイト
21. 「少人数の演習で切磋琢磨」2016年6月, 『学報』第106号, 北海学園大学
22. 「ゼミ紹介 上野誠治3年ゼミ(1部)【言語学・英語学】」2016年12月, 『ヒューマン』Vol.8, 北海学園大学人文学部
23. 「ご退職記念号に寄せて—船岡誠教授・川上武志教授をお送りする—」2017年3月, 『人文論集』第62号, 北海学園大学人文学部
24. 「課題と展望」2017年3月, 『現状と課題—自己点検・評価報告5—』, 北海学園大学
25. 「研究室のいま」2017年3月, 『豊平會報』Vol.78, 北海学園大学同窓会
26. 「【平成29年度保護者懇談会】大学と保護者 相互理解深める」2019年12月, 『学報』第112号, 北海学園大学
27. 「ご退職記念号に寄せて—本城誠二教授をお送りする—」2018年3月, 『人文論集』第64号, 北海学園大学人文学部
28. 「現状との乖離からの脱却に向けて」2018年7月, 『教育開発ニュース』第39号, 北海学園大学
29. 「英語を研究する楽しみ—動物三題—」2019年12月, 『学報』第120号, 北海学園大学
30. 「知的体力と人間力の涵養を目指して」2020年3月, 『北海学園大学創基七十周年記念誌』,

北海学園大学

31. 「人文学の学びから、人間の営みを見る確かな眼を養い人生の羅針盤を手に入れる」2020年6月、『2021（令和3）年度北海学園大学大学院要覧』、北海学園大学
32. 「人文学の学びから、人間の営みを見る確かな眼を養い人生の羅針盤を手に入れる」2020年7月、『北海道新聞』2020年7月1日夕刊、2021年7月31日夕刊再掲
33. 「人間の営みを見る確かな眼を養う」2020年9月、『学報』第123号、北海学園大学
34. 「日本英文学会北海道支部第65回大会開催挨拶」2020年12月、日本英文学会北海道支部ウェブサイト
35. 「新型コロナウイルス断想」2020年12月、『年報 新人文学』第17号巻頭言、北海学園大学大学院文学研究科
36. 「英米文学や英語学との邂逅」2023年2月、『ヒューマン』Vol.20、北海学園大学人文学部
37. 「北海道大学大学院文学院と本学文学研究科 特別聴講学生に関する協定締結」2023年3月、『学報』第133号、北海学園大学
38. 「ゼミ紹介 上野誠治3年ゼミ（1部）【言語学・英語学】」2024年6月、『ヒューマン』Vol.22、北海学園大学人文学部
39. 「【令和6年度北海学園学術研究助成事業報告】英語の歴史的言語学的変化に関する研究綴り字と発音の乖離解消は至難の業か」2025年12月、『学報』第144号、北海学園大学
40. 「退職にあたって—ある英語学教員の遍歴—」2026年3月、『人文論集』第80号、北海学園大学人文学部、『学園論集』第199号、北海学園大学
41. 「【退職教職員からメッセージ】知的体力を養い生き抜く力を」2026年3月、『学報』第145号、北海学園大学